

整備機器

新商品

小野谷機工

天井据え付け型

「バリアスツールハンガー」



三田村廣大さんと「バリアスツールハンガー VTH-SP02タイプ」

21年11月に会社設立50周年という大きな節目を迎えた小野谷機工(株)(福井県越前市、宇田公郎社長COO)。タイヤ整備機器をはじめ更生タイヤ製造・廃タイヤ処理の関連機器の国産メーカーとして、市場に製品を供給している。自動車が100年に一度という大きな変革期を迎え足回り整備の重要性がますます高まる中、作業の効率化・省人化と安全性を両立する新製品の開発に挑み続けている。その中から今回は「バリアスツールハンガー」にフォーカスする。新製品の解説と実演(デモ)を担当してくれたのは商品開発本部機器商品開発グループの三田村廣大リーダーだ。

ハンガーとは一般的に吊り下げ型の器具を指す。タイヤ店の整備に使用する吊り機を意味する。

今回新たに開発したのは「バリアスツールハンガー VTH-N 01/N 02・SP 01/S P 02」。「ユニアーサルハンガー」の設計思想をさらに深化させ、作業現場での使いやすさをより一層追求したのだ。このほど本格販売を開始した。

ハンガーとは一般的に吊り下げ型の器具を指す。タイヤ店の整備に使用する吊り機を意味する。

小野谷機工ではこれまで、天井への据え付け型クレーンシステムとして「ユニバーサルハンガー UVH」を展開。また自由に移動し任意の位置で使用可能な大型インパクトレンチ吊り機「レッグカーブ」もその範疇に入る。「レッグカーブ」では先に「F-55・F-500シリーズ」という新製品をラインアップしたばかりで、市場で高い評価を得ている。

今回新たに開発したのは「バリアスツールハンガー VTH-N 01/N 02・SP 01/S P 02」。「ユニアーサルハンガー」の場合、その構成上、インパクトレンチのみ、あるいはナットランナーのみという組合せでしか吊り下げることができなかつた。

優れたコストパフォーマンスを実現した。三田村さんが「バリアスツールハンガー」を実際に操作する。インパクトレンチを使用した後、続けてナットランナーを使おうとするが、ホルダーハー部の機器を入れ替えてナットランナーを使えなければならない。さらにレールなど部材の一部が外注による購入品のため、どうしてもコスト高に繋がつたという。

一方、今回開発の「バリアスツールハンガー」では、機器を2機同時に吊り下げる機能を自社での一貫生産に切り替えたことで、工具を自社で一貫生産で作業が効率的となりました」と語る。

ハンガーから取り外したい場合、カプラから取り付けが可能なハンガー本体の上部にはスプリングバランサーを配置。整備機器を上下に高さを変える

大型車の作業を軽労化・効率化

三田村さんは「大型車用タイヤの交換作業の際に使う大型インパクトレンチやホイールナットのトルクを管理するナットランナーは機器自体が非常に重く、作業担当者にとって負担が大きい」と指摘する。「大型車用タイヤの整備作業の軽労化を図る」というのがこの「バリアスツールハンガー」の開発コンセプトだ。

「ユニバーサルハンガー」の場合、その構成上、インパクトレンチのみ、あるいはナットランナーのみという組合せでしか吊り下げることができなかつた。

優れたコストパフォーマンスを実現した。三田村さんが「バリアスツールハンガー」を実際に操作する。インパクトレンチを使用した後、続けてナットランナーを使おうとするが、ホルダーハー部の機器を入れ替えてナットランナーを使えなければならない。

三田村さんは解説「バリアスツールハンガー」は、エアードライバー型、VTH-Nは一般的なスピアラル型、VTH-Sはキャタピラ型。特に後者は保護層があるケーブルベア型。後に後者はツール供給の配線や配管の絡みを防ぐ構造なので、垂れ下がったホースが車両に引っ掛けられるようなトラブルの発生を大幅に抑制した

